虹の架橋は足利屋・さくらもーるアスクが毎月１日発行する地域新聞です

虹の架橋

みどり市地域おこし協力隊　獅子内

第３４２号
令和６年２月１日発行
企画・編集　松﨑　靖
発行　㈱足利屋洋品店
みどり市大間々町4-1380（〒376-0101）
TEL 0277－73－1212
Fax 0277－70－1066

今月の題字
獅子内珠羅さん
（みどり市東町）

青森県出身の獅子内さんは、みどり市地域おこし協力隊員として東町の魅力をSNSで発信。ドローン免許取得の教官で、みどり市観光ガイドの会のアイドル的存在でもあります。

コノドント館第一〇六回企画展
足尾鉄道全線開通一一〇年

わたらせ渓谷鐵道の前身の足尾鉄道は、足尾銅山で産出した粗銅を東京の精銅工場や日光の精銅所へ運ぶ目的と、銅山の資材や足尾に住む人々の生活物資を大間々などから足尾へ運ぶ目的で大正三年（一九一四）に全線開通しました。

足尾鉄道株式会社の設立発起人には、勢多郡東村や黒保根村、大間々の当時の有力者の名前が四三人も載っており、足尾鉄道開業への期待の高さが想像できます。

開業時は大間々町駅

開業当初、大間々駅は「大間々町駅」という駅名でした。理由は両毛線に「大間々駅」（現在の岩宿駅）があったからでした。

明治四四年四月十五日、相老と大間々間が最初に開業した日の写真には「大間々町」駅の看板が写っています。

本企画展では、全線開通一一〇年を記念し、開業期の文書や写真、国鉄時代の鉄道用具、わたらせ渓谷鐵道開業後の資料などを展示します。

足尾鉄道の歴史を振り返りながら、イルミネーション列車に乗って幻想的で神秘的な沿線の風景もお楽しみ下さい。二月二九日まで毎日開催しています。

わたらせ渓谷鐵道への軌跡
～足尾鉄道全線開通110年記念～

展示期間　2月23日～４月14日
【休館日　月曜（祝日の場合は翌日）】
会場　大間々博物館（コノドント館）
開館時間　午前９時～午後５時
（入館は午後4時半まで）
観覧料　大人200円　小中学生50円
＊障害者手帳等をお持ちの方と付き添いの方１名は無料

小耳にはさんだ いい話
（文責・靖）
《342》

小さな世界都市

私の人生の師から「なぜ豊岡は世界に注目されるのか」という本をいただきました。著者の中貝宗治さんは兵庫県議会議員を十年務め、その後の二十年は兵庫県豊岡市長として、理想の街づくりを実現させた方です。

中貝さんが目指してきたのは「小さな世界都市」。人口規模は小さくても、世界の人々に尊敬され、注目されるまちを目指し、絶滅したコウノトリを野生復帰させたり、受け継いできた地域の財産を守り育て、小さな街に人が集まる演劇祭を開催し、ジェンダーギャップを解消し、若い女性が戻ってきたくなる魅力溢れるまちづくり実現させました。

今から五十三年前、野生のコウノトリの最後の一羽が豊岡で息絶え、日本の空からコウノトリが消えました。絶滅前にコウノトリを守る運動が豊岡で起こり、人工飼育が続けられましたが、ヒナは孵ることはありませんでした。転機が訪れたのは一九八五年、ロシアから六羽のコウノトリの幼鳥が贈られました。飼育員の松島興治郎さんがたった一人で大切に育て、人口飼育の開始から二十四年目の一九八九年に待望のヒナが誕生したのでした。農薬や環境汚染等で絶滅した野生の動物を再び野に帰す取組は「コウノトリも住める環境」を創ることでもありました。コウノトリも住める環境への取り組みを重ね、二〇〇五年九月二四日、コウノトリの野生復帰の日、秋篠宮両殿下のテープカットで五羽のコウノトリが大空に飛び立ちました。コウノトリのカップルはオスとメスが平等に巣作りをし、子育てをします。その姿はジェンダーフリーのお手本にもなっています。

現在、日本国内で生息するコウノトリは三〇〇羽を超えました。羽を広げると二メートルにもなるコウノトリが空を飛ぶ姿は豊かな環境の象徴となり、豊岡は世界中から注目を浴びるようになりました。

豊岡市には「永楽館」という芝居小屋があります。五年前、四国で全国芝居小屋会議が開かれた時、中貝宗治さんとお会いして話を聴き、街づくりは一歩一歩の積み重ねだと実感しました。

大間々も小さな世界都市になれると思います。

世界一小さな足利屋トイレ美術館

今月の版画《342》
山田清昭さん『初神籤』

愛媛県内子町に住む版画家の山田清昭さんから毎年、手漉き和紙に刷った版画の年賀状をいただいています。今年の年賀状には「初神籤」（はつみくじ）の絵に「昭和九十九年元旦」と記されていて、昭和も遠くなったと感じました。

山田さんとお会いしたのは今から二十数年前、全国芝居小屋会議が開かれた時でした。山田さんの町にも「内子座」という古い芝居小屋があります。昔の芝居小屋を町の財産として大切に残そうという共通の思いが山田さんとのご縁をつないでくれました。今年は熊本県の「八千代座」で全国芝居小屋会議が開かれます。

靖ちゃん日記

令和六年一月十六日（火）雪

訪日外国人観光客をみどり市に受け入れる資料を作るため、台湾やインドネシアから来た六人を連れて、外国人が好みそうな所を案内した。あいにくの天候だったが雪景色の高津戸峡や神明宮は最高だった。創業二三七年の岡商店の醤油蔵では、明治の大火の際に醤油で火を消し、町の半分を救った話をして、大間々は三方良しの町だと伝えた。白壁の土蔵が立ち並ぶ蔵人・新宇は是非見せたかったので店休日だったが店主の新井規夫さんに頼んで開けてもらった。土蔵を民泊施設に改装した内部の「和」の雰囲気に皆感動していた。薪ストーブのある六角堂で規夫さんの説明を聞いた。歴史を未来に繋げようとする熱い思いに男のロマンを感じた。「男のロマンは女のフマン」だという。女のフマンは男がガマン。「逆らわず、ニッコリ笑って従わず」。これが女房に捨てられない男の生きる道だ。

六度目の「辰」声高に『福は内』

二月三日は節分です。子供の頃は父親に連れられて神明宮へ行って豆を撒き、家に戻ってからは神棚、恵比寿大黒様、屋敷稲荷様、井戸、お勝手などあちこちで「鬼は外、福は内」と大声を出して豆を撒きました。昔はどこの家からも「鬼は～外、福は～内」の大きな声が聞こえてきました。あれから七十年。今年、六度目の年男を迎える辰年の私は祖父からの慣習を守って、近所迷惑にならない程度のちょっとだけ大きな声で『福は～内』の豆を撒きます。

十二年後の年男を目指して、古き良き伝統を継承して参ります。

❤やっちゃんの似顔絵提供：ひさかさん

虹の架橋 ⇑ 検索 で、インターネットからでもご覧いただけます。

第三百四十三号は令和六年三月一日（金）発行予定です。